

# 特集

## 救急医の 国際貢献・国際交流 ～身につけるべき知識と技術～

救急医のなかには、「医師として国際的に貢献したい」「海外で学んだことを日本の医療に活かしたい」と思う人がどのくらいいるのでしょうか。

インターネットの発達により、今は日本国内にいても海外と同じ知識や技術を即座に学べるようになりました。このため、従来のように海外の研究室へ行き、知識や技術を学ぶ「留学」の意義が問われる時代でもあります。しかし、近年では「留学」にとどまらず、医師としての自分のキャリアを積極的に活かす「国際貢献」や「国際交流」を志す人が増えているように思います。日本で身につけた知識・技術を開発途上国や国際組織で活かす「国際貢献」と、海外で得た経験や知識を日本へ持ち帰り国内の医療に変革をもたらす「国際交流」。ビジネスの世界ではもはや当然となったこのような“グローバルな働き方”は、医療の世界においては、今のところまだ少数派です。しかし、“人”を対象とする医療は世界に共通する分野でもあり、今後“グローバルな働き方”を目指す医師はますます増えていくものと思われます。そして、多様性と柔軟性を特徴とする救急医は、“医療のグローバリズム”にもっとも近いところにいるのかもしれない。

そこで今号の特集では、「救急医の国際貢献・国際交流 ～身につけるべき知識と技術～」と題し、これまでに医療の国際貢献・国際交流を行ってきた/今まに行っている先生方から読者の方々にむけて、実際にどのような国際貢献・国際交流の機会や事業があるのか、また、そこで活躍するためにどのような知識・技術・資格が必要で、何を準備しておくべきのかななどを、具体的にご教授いただきました。まさに、これから読者の方々が国際貢献・国際交流を実現するための「医療のグローバリズム・ガイドブック」といえる内容です。

今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響で、これまでと同じような方法での国際貢献・国際交流が難しい世界の状況となってしまいました。しかし、感染の影響で医療の国際貢献・国際交流が途絶えてしまうわけではなく、このようなときだからこそ求められる国際貢献や国際交流の形があるはずです。本特集が、ポストコロナの時代における新たな国際貢献・国際交流の実現へむけて考えを巡らすきっかけになることを願っています。

『救急医学』編集委員会

企画担当：名古屋市立大学大学院医学研究科先進急性期医療学分野 松嶋 麻子